特集
―没後100年が近づいた―
「梧竹さん」

小城市出身の書家で『書聖』と称される中林梧竹。「梧竹さん」と気さくに呼ばれ、身近な存在として親しまれています。
今回は梧竹特集の第1弾として中林梧竹の人生、人柄、書の魅力に迫ります。

進化し続けた梧竹の「書」

中林梧竹翁顕彰会　山口三郎会長

梧竹さんの魅力は「一生進化し続けた」ことですね。幼少の頃から書の天才と言われていましたが、本格的に書の道を歩み始めたのは、廃藩置県後の45歳頃からと考えられます。

その進化は使用した「筆」の変化に現れています。特に56歳で清国（中国）に渡った影響は大きく60～70歳代は「長鋒筆」という、鯰のひげのように長い筆を好んで使っていました。この筆はとても長くて柔らかいため、非常に書を書くのは難しいと言われています。

一方、80歳代になると、逆に超短鋒筆という筆先が短い筆を愛用するようになりました。その頃、金文（篆書体）を修得したことからヒントを得て、心象表現を表した作品が多く見られます。梧竹さんは「紙と墨を用意してくれたらどこへでも行く」と全国を巡っていたそうです。梧竹さんが遺した書への情熱と作品の素晴らしさをこれからも伝えていきたいですね。

中林梧竹年譜

◎年齢は数え年で表記しています。

1827年　文政10年　1歳
4月19日小城町新小路に中林経緯の長男として生まれる。幼少より書の才能を発揮し、神童と称される。

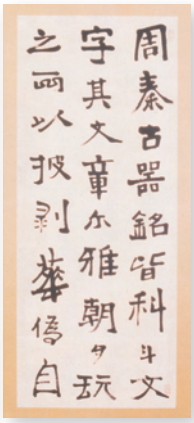
1871年　明治4年　45歳
廃藩置県により小城藩は小城県となり、この頃から一切の役職を辞し、書に専念するようになる。

1875年　明治8年　49歳
桜岡公園（現小城公園）の建設に尽力し、自らの筆により「桜岡公園」の碑を建てる。

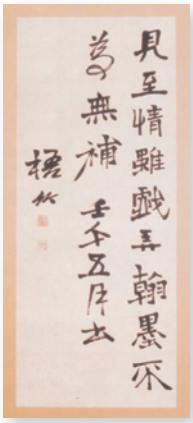
1882年　明治15年　56歳
長崎の清国領事の余元眉の帰国に伴って清国に渡る。長鋒筆による立ち書きを会得する。

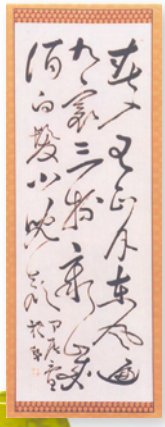
1884年　明治17年　58歳
清国から帰国する。銀座の伊勢幸洋服店に住む。

梧竹作品の移り変わり



◀「周秦古器銘」（56歳）





◀「春入王正月」（78歳）

書に生きた梧竹の人生

梧竹の会　梧竹観音堂四代目当主　中林秀利さん

私の先祖・中林梧竹は書一筋に生きた自由奔放な人で、書を愛するあまり家庭人としては向いていなかったようです。

長崎で中国人が持っていた「書」の字典（楷書古鑑）を約2年かけて模写したり、さらに、86歳で脳卒中で倒れて、半身不随になり、三日月に帰って来ますが、亡くなる2か月前に「王羲之の書を勉強したいので本を送って欲しい」と長崎の友人に手紙を書いています。普通なら療養に専念するところですが、梧竹の飽くなき書への探究心が感じられます。

また、呼ばれるとどこへでも書を書きに行く人でしたが、お代をいただいても人に振る舞い、結局、帰りの交通費に困ったという逸話も聞いています。見返りにこだわらない人だったようですね。

梧竹が建てた観音堂には今でも梧竹の書を愛する方々が見えられ、私もそんな梧竹を愛する一人で、今後も梧竹の魅力や生き様を伝えて行きたいと思っています。

1891年　明治24年　65歳
副島種臣の勧めにより、「十七帖」の臨書を明治天皇に献上し、白羽二重の下賜をうける。

1896年　明治29年　70歳
銀座伊勢幸から小城へ帰る。

1897年　明治30年　71歳
清国に渡る。帰国後再び伊勢幸に住む。

1898年　明治31年　72歳
富士山頂に「鎮國之山」の銅碑を建てる。

1906年　明治39年　80歳
小城に帰る。観音堂の建設を始める。この頃、長鋒筆から短鋒筆に移行。

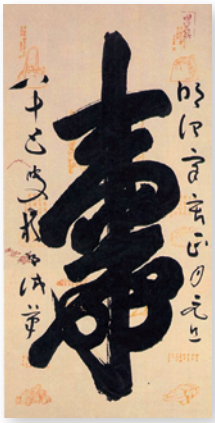
1908年　明治41年　82歳
皇后陛下から観音堂に、宝帳を下賜される。また、宮中女官12人から、和歌帖「三日月帖」を贈られる。

1912年　明治45年　86歳
前半：上海の呉吟軒に依頼して超短鋒筆を作らせる。
後半：10月に銀座の理髪店にて脳卒中を発症し、伊勢幸で療養する。

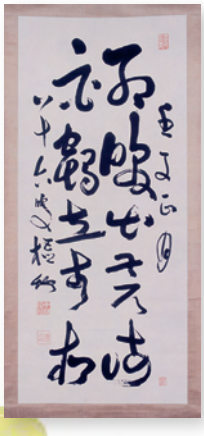
1913年　大正2年　87歳
5月　三日月村に帰り武雄、嬉野温泉で療養する。
8月1日　持仏の観音像を高取伊好に贈る。
8月4日　午前2時に梧竹村荘で逝去。長栄寺（三日月町）に葬られる。法名は「梧竹堂鳳栖五雲居士」

◀梧竹が使用した短鋒筆（左側が超短鋒筆）

◀「福」（81歳）



◀「寿」（85歳）



◀「紅暾出黄海」（86歳）

～ 新春てい談 ～

「書聖・中林梧竹の魅力を語る～没後100年を迎えて～」

梧竹さんの人柄や生涯変化し続けた作品の魅力、その偉業をよく知る3名が梧竹の大作「大和真富貴（やまとしんふき）」の前で語り合いました。

・**古川康（佐賀県知事）**：書をはじめとする地域文化の継承発展に力を入れている。

・**中尾清一郎（佐賀新聞社社長）**：書道展を毎年開催し書の普及・発展に尽力されている。

■書聖・中林梧竹の魅力とは

ー自分のスタイルを貫くー

江里口市長：梧竹さんは中国で勉強し、そこから自分のスタイルを作って、貫き通しました。そういうところに梧竹さんの人間的な魅力を感じますね。また梧竹の書は、難しい部分もあり、なかなか我々も読めない部分もあります。ただ、上手下手というより、『気』みたいなものが伝わってくるように感じますね。

ー変幻自在な書ー

古川知事：梧竹さんの書を一言で言うと、『世界の広さ』『変幻自在ぶり』ではないでしょうか。普通、書家はある程度の書風を確立し、それを突き詰めて行くことが多いのですが、梧竹さんの場合は、さまざまな書が残されています。最初は中国の書に学び、それを突き詰めて行くなかで、日本の書に目覚め、それをさらに追求する。終始学ぶことを忘れなかった梧竹さんらしさ、また一方で、梧竹はわかりにくいと言われていますが、この幅の広さが梧竹さんそのものの魅力だと思います。

ー梧竹さんの行動力ー

中尾社長：知事が言われた『世界の広さ』は『活動範囲の広さ』にも当てはまるのではないでしょうか。当時（幕末の時代）渡航が難しかった清国（中国）に2度も渡り、また、北海道を始め、全国各地を訪ね、かなりの高齢になってから富士登山をするという行動力に驚かされます。

■中林梧竹の書のどこに魅力を感じるか

ー錬心（れんしん）の書ー

江里口市長：今はもう亡くなられていますが、徳島県に日野俊顕（ひのとしあき）先生という梧竹研究家がいらっしゃいまして、梧竹の書に対して「錬心」という言葉をよく使われていました。「書はきれいに書こうと思えば書ける。パソコンでも書けるし、書道体でもきれいな字は書けるが、梧竹の書というものはそうではなく、気や大きさ、迫力、そういったものが浮き出てくる、また、伝わってくる書だよね。」と。そういった意味でも、我々に大きさとか強さとか、梧竹さんの人間的な内面の部分、気持

・**江里口秀次（小城市長）**：書聖・中林梧竹没後100年記念事業実行委員会委員長。

ちの部分が伝わってくるような感じがする、それが梧竹の書の魅力だと思っています。

ー梧竹の人柄に通じる書の魅力ー

古川知事：梧竹の書の魅力は梧竹さんという人の魅力と切り離すことができないと思っています。梧竹さんが初めて中国へ渡ったのは50代。当時の平均寿命がそのくらいの時に、海外へ渡航し、新しいものに触れていくわけですね。国際化や生涯学習というと、最近の行政課題のように見えますが、地で行っていたのが、梧竹さんだったのだろうと思っています。それと梧竹の魅力は一つに作品数の多さですね。いろんな作風があり、「梧竹の書はこうなんだよね。」と一言でまとめて言えないのが、梧竹の魅力といえるのではないかと思っています。

ー愛され続けてきた梧竹作品ー

中尾社長：100年前の人の作品がこんなに残っているということは、いかにたくさん書いたか。また、この時代の人が梧竹の書を評価していたということに他ならないということだと思います。もちろん、世の中には書家に限らず、芸術家として生きている間は評価されずに寡作に終わった人たちもいますが、存命中から、そして、数百年後にまで作品が残るというのは、愛され続けたということ、そこに普遍性があったということで、私たちはある意味安心して梧竹の書を良いものとして見ることができますよね。書の鑑賞を始めるにあたって、また、佐賀にもこんなに著名な多くの人に愛された書家がいるという点でも梧竹の書を愛眼する、楽しむことは、とても大事なことなのだろうと思います。

■佐賀が生んだ書の巨人・中林梧竹

ー副島種臣（そえじまたねおみ）との縁ー

古川知事：梧竹は中国の人とコミュニケーションをするのにどうやっていたんでしょうか。

中尾社長：筆談でしょう。まだ清朝と明治維新政府があまり交流のなかった時代に、清国に渡り、清朝の大官とやり取りするわけですが、まず、詩文や書で筆談するわけですね。梧竹さんも筆談であまりに字がうまいので、清国の人たちが驚いて、むしろ向こうからコミュニケーションを取ってきたのではないでしょうかね。

江里口市長：梧竹さんが中国に行くきっかけや中国へ渡った後のことですが、副島種臣の支援とかあったんでしょうか。

中尾社長：この梧竹記念館の資料に出ていますが、まず、梧竹の能書を見出したのは当時、長崎にいた清国の貿易商人です。貿易商人が外交官である清国領事に日本人にもこんなにすごい書を書く人がいるんだよ、と梧竹を紹介したのがきっかけになったのだと思います。また、梧竹さんが東京でお世話になった銀座の伊勢幸に紹介したのは、それこそ、副島種臣だと言われています。

■中林梧竹の中で好きな作品は

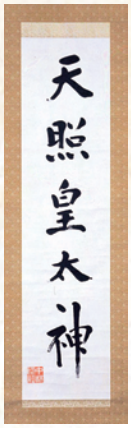
ー富士山頂の『鎮國之山（ちんこくのやま）』の銅碑ー

江里口市長：私は『鎮國之山』という書です。これは富士山の頂上に銅碑として残っているんですが、日本一の山に梧竹さんの銅碑があるというのは、梧竹さんが日本一の書家であるのではないかなと思います。ただ、この意味というのは、知事が言われたように、梧竹さんが書の勉強をして、体験をしていった中で、我が郷里日本を考えた時に『鎮國之山』というイメージを持っ

て、それを富士山の頂上に掲げたのかなというロマン的なものを人間梧竹に感じるんですね。そういった意味でも、この文字は印象に残っており、好きな言葉でもあります。

ー楷書の名品『天照皇太神』ー

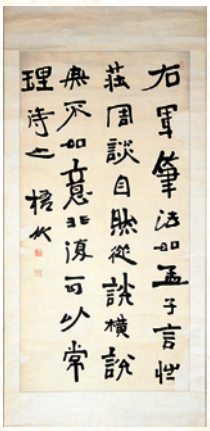
古川知事：私の一番好きな作品は、『天照皇太神』と書かれた楷書の作品。何度見ても素晴らしい作品だと思います。見れば見る程、あの字をあれ以上に誠実にきちんと書くことは出来るのだろうかと思うくらい、素晴らしい字だと思います。このほかにも『江風山月』のように、象形的なものも含めた形で書いてあるものも面白いなと思いますし、『登岳陽楼』のような、堂々とした作品もいいなと思います。



▶徳島県立文学書道館蔵

ー六朝風ののびやかな作品ー

中尾社長：今回、梧竹のことをお話するにあたって、少し調べたところ、六朝書への開眼というのが梧竹の転機になったというのを見て、梧竹記念館の書を前に今、このようにお話しながら、のびやかで、いい字だなと、という気持ちになっております。書は人なり、あるいは、文字は時代を映すということで、聞いておりますが、何と書いてあるか分からないけれども、分からないなりに大変に結構なものだと拝見しております。六朝書への興味が生まれました。



「書聖・中林梧竹没後100年記念事業　特別展」

◆ 期　間：**平成24年12月15日（土）～平成25年1月20日（日）**（３館で同時開催）

◆ テーマ・会場・展示内容：

- **「人間梧竹の原点」**【中林梧竹記念館（桜城館内）】　中林梧竹の人柄に触れる作品・遺品100点
- **「至極の屏風展」**【小城公民館】　畳敷きの空間で味わう屏風の大作13点
- **「今に生きる錬心の書」**【佐賀県立美術館】　各年代の代表作を60点

◆ 入場券：**1,000円**（３館を見学できます）

※詳細は開催間近の広報「さくら」12月５日号「梧竹さん」第２弾でお伝えします。

プレイベント
～もっと梧竹さんに近づいてみませんか～

≪講演会≫ ◆定員：先着60人（当日受付）　◆参加費：200円　◆場所：歴史資料館（桜城館内）

「梧竹書のどこに魅かれるか」　1月21日（土）　14時～15時30分
「わが家の梧竹再発見報告会」　2月18日（土）　14時～15時30分

≪史跡探訪会 ～梧竹ゆかりの地を訪ねます～≫ ◆定員：各コース35人（要予約）

「多久・武雄・嬉野コース」　2月23日（木）10時～16時　《参加費》1,000円程度（当日徴収）
「小城市内コース」　3月10日（土）13時～16時　《参加費》200円（当日徴収）

※特別展に向けさまざまなイベントを企画しています。広報「さくら」（毎月20日号）の「梧竹記念館だより」をご覧ください。

【問合せ・申込み】小城市立中林梧竹記念館　☎71-1132

今年の一文字

佐賀県知事　古川康

梧竹の書に「金烏昇」という作品があります。黄金色の烏が空に昇っていくというお正月にふさわしいもので、もともとの作品は金色の扇に書かれています。

いかにもめでたい風情がなんともいえずうれしく、その「昇」の字をいただいて書いてみました。

書を書くのに、先人の偉大な書のマネをするというのは広く行われている練習法でもあります。この「昇」という字を書いていると、この字が書かれた時代に飛んでいって梧竹先生とお話しをしているような気になりました。

この「昇」にはもうひとつの意味も込めています。サガン鳥栖のJ1「昇」格です。皆様のおかげでサガン鳥栖がJ1に昇格することができました。今年のベストアメニティスタジアムには、いままでテレビで見ていたあのチーム、あの選手たちがやってきます。

ぜひとも足を運んでサガン鳥栖を応援しましょう。

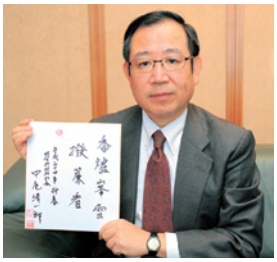
鼎談に寄せて

佐賀新聞社社長　中尾清一郎

今回の鼎談は、梧竹の傑作に囲まれての心地良い語らいでした。

私は梧竹の作品のイメージと、新年の寒さで気持ちが改まる詩歌を選び下手を承知で書きました。

「香炉峰雪撥簾看」は唐の詩人・白居易（白楽天）の七言律詩の一句です。白居易は平安時代から「白氏文集」として多くの貴族や文人に親しまれ、清少納言の枕草紙にも、「少納言よ、香炉峰の雪はいかならむと仰せらるれば御格子上げさせて御簾を高く上げたれば、笑わせ給う」と中宮定子（及び自分）の教養高さを表す一場面で有名です。寒く晴れた朝、簾を跳ね上げて見る雪を頂いた香炉峰の美しさが眼前に迫るような清々しさです。梧竹さんは自らの道を究めるため多くの困難をおして混乱期の中国を旅しました。芸術の持つ癒しの力を今ほど日本人が必要としている時代はありません。



あけましておめでとうございます

小城市長　江里口秀次

小城市の皆さまも、心新たに新年を迎えられたことと思います。特に、昨年は東日本大震災、津波、原発問題で多くの皆さまがこの災害に心を痛め、また、東日本の復旧・復興に対して、“何か自分にもできることがないか”と、いろんな形で支援していただきました。逆にこの震災を通して、日本の国のすばらしさを改めて認識し、感じることができました。

また、経済的にも円高、不況で大変な経済状況でもありました。このような昨年を私たちはしっかりと振り返りながら、新しい年を迎えなければいけません。

小城市は合併し、8年目を迎えます。本庁舎への一本化・中心市街地のまちづくりなどの事業を進め、また、中林梧竹翁の没後100年の記念事業も計画しています。皆さまと共に活力ある充実した地域づくりを目指して一緒に取り組んでいきたいと思っています。

平成24年は私にとって年男でもあり、2期目の最終年度にもなります。合併してよかったと言われるような『小城市づくり・まちづくり』を皆さまと共に取り組むために、本年も引き続き「語る会」を開催しますので地域にお邪魔した時には小城の課題、小城の夢を一緒に語りましょう。本年もよろしくお願いします。

～今年の文字～

今年は中林梧竹翁が「書」一筋に無我夢中で生きてこられたこと。そういう意味も含めて私は「夢我夢忠」と書かせてもらいました。

まず一つめは、自分自身「我」の人生にしっかりとした「夢」を持ち、二つめは、真心「忠」を込めて尽くすこと。真心を持って仕事に専念し、その真心を込めた仕事に「夢」を持ってもらいたいという意味です。そういう思いで、この文字を書きました。

自分の人生にしっかりとした夢を持ち、気持ちの持ち方次第でその仕事がおもしろく、また、大きく変わってくるのではないかと思います。

みなさん夢を持ちましょう！